



インタビューにあたって（インタビューシリーズ： 歴史研究の隣人たち）

井上， 舞

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 17:61-64

(Issue Date)

2025-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100505410>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100505410>



インタビューシリーズ

歴史研究の隣人たち

第5回 石川家文書整理会のみなさん

司会 井上舞

同席 市沢哲・古市晃・木村修二



インタビューにあたって

これまでのインタビューシリーズ「歴史研究の隣人たち」では、家じまいアドバイザーを皮切りに、建築家、雑誌編集者、古書店業者、新聞記者と、各分野の専門家の方を対象にお話を伺ってきた。第5回目となる今回は少し趣向を変えて、地域資料の整理に集う人々と、資料の所蔵者にお話を伺うことになった。

人文学研究科地域連携センターでは設立以来、残された多種多様な歴史資料と、これに関わる様々な人々との関係性に着目した「地域歴史遺産」という概念^①を軸に活動を展開してきた。そして、この考え方に基づいて、兵庫県内を中心に、地域に残る史資料を地域の方と整理する活動を続けていく。「日常生活の中で意識、無意識を訪わず、歴史に関わ^②り、すでにもう隣り合わせの関係にあり、むしろこれからより親密な関係を築いていく相手」を「隣人」と呼ぶのであれば、今回のインタビューの対象の方々はまさしくその対象となるであろう。さらに言えば、彼らは「歴史研究の隣人」であると同時に「地域連携センターの隣人」とも言える。地域の方と協働した歴史資料の整理作業の事例は多数あるが、今回の「隣人」はその中でも十年

以上一緒に活動してきた、朝来市生野町の石川家文書整理会に参加する方々である。

まず、インタビューの補足説明の意味も込めて、石川家文書とその整理会について紹介しておきたい。石川家は、近世中期に姫路から神西郡森垣村（現朝来市生野町口銀谷）に移住し、現地の有力者や生野代官と関係を結び、広大な土地を有し、諸商売を以て家を発展させてきた、いわゆる豪農商である。同家では業種商を営んでいたと伝わっていたが、調査・研究が進むに及び、業種商にとどまらず、生野鉱山の採掘にかかわる物資・人足の手配をはじめ、鉱山周辺地域の経済・文化にかかわる諸活動を展開していたことが明らかになってきている。時代の移り変わりにともない、山師や掛屋、庄屋の家など、生野鉱山やその周辺地域で活動していた人々が生野を去り、その活動実態を示す資料の多くが失われた中であって、数多の資料を携えたまま今も生野に在る石川家と石川家文書の存在意義は、今後の生野史を考えるにあたつて重要な役割を持つている。

しかしながら石川家文書は、昭和中期頃に郷土史家たちが同家の文書を利用し、研究した形跡があるものの、近年神戸大学との連携事業において本格的な調査が開始されるまで、その存在は地元でも忘れ去られていた。石川家の中で

も、家の歴史はあまり伝わっておらず、さらに同家の方針によつて、文書の持ち出しは厳しく管理され、研究者の問い合わせに対しても、断ることが多々あったという。

そんな状況が変化したのは、二〇〇八年のことである。当時、朝来市と神戸大学は連携協定を締結し、人文学研究科地域連携センターは事業の一環として、生野地域での歴史資料の掘り起こし、整理に取り組んでいた。ここに、石川家文書の整理について相談を持ちかけたのが、現当主の石川道代氏である。相談内容については、インタビューの中にあるのでそちらに譲るともかく、この相談がきっかけとなり、まずは内蔵に収められていた文書群の整理が開始された。内蔵文書だけで、中性紙箱にして百箱以上に及ぶ膨大な文書群である。その整理もままならないうちに、二〇一四年、今度は外蔵から新たな文書群が発見された。蔵の状態を鑑み、全ての史資料を搬出したものの、こちらの文書群の点数もまた膨大であった。筆者は内蔵の文書を整理していた頃から院生・研究員として石川家文書に関わっていたが、その後、前担当者の転出等により、二〇一三年より朝来市の担当となっていた。資料整理の経験が浅いにもかかわらず、眼前に積み上げられた全く未整理の文書群を前に、絶望的な気分になったことを憶えて

いる。

ともかく、埃だらけの外蔵文書をなんとかしなければならぬと考え、企画したのが、石川家文書整理会であった。それまでも不定期に地域住民との整理会は開催していたが、これを定年化し、外蔵文書の整理に対応しようと考えたのである。活動を始めるに際しては、①資料を長期保管できる環境を整える、②この会を契機として、出来得る限り多くの人に石川家文書が存在を周知し、かつ触れてもらう機会を作ること、あわせて③長期にわたつて活動していける体制を整えること、という目標を掲げた。まず、くずし字を読まなくてもできる作業として、古文書の付番だけという作業を行い、次いで、外蔵文書の中に大量に含まれていた蔵書の目録作成に取り組んだ。この辺りの活動については別稿^③で述べているので、そちらを参照されたい。これらの作業は二〇一九年度に完了し、現在は外蔵内の木箱に詰め込まれていた古文書（石川家文書外蔵①北一〇一）の目録作成・写真撮影を進めている。

作業にあたつては、特に役割分担を設けていくわけではない。早めに来た人が適宜準備をする。目録を採れる人は目録を採る。写真撮影班は目録を採り終わった文書を撮影する。筆者の仕事は主に出納で、整理する文書の付番の確認

（以前の作業で付番は完了しているが、付番ミスが多々見られたため）、整理した文書の確認、状態が悪い文書については薄様で梱包するなどの保全処置を行っている。目録カードは大学に持ち帰って、入力・チェック作業を行い、目録集としてまとめている。以上のような作業内容からは、石川家文書整理会は組織化された資料整理団体のように見えるかもしれない。しかし実態はかなり緩やかな運営が行われている。

整理会を始めた当初は、もう少し体系的に、資料整理ボランティアとして組織化しようという思惑がなかったわけではない。ただ、それぞれ手に取った文書を読みながら談笑する参加者の姿を目の当たりにし、またその緩やかさを求めてやってくる新たな参加者を受け入れるにつれて、この場はこのままのほうが良いのではないかと、と思い始めた。整理会には、座談会にも参加いただいた小椋さんや小山さんといった、地域の歴史資料の保全、研究を牽引する方が参加されている。であれば、研究者の立場としては、むしろその自由に展開する資料整理の〈場〉を俯瞰しつつ、そこから地域住民が主体となることが重要ではないかと考えたのである。以降、石川家文書の目録を作成するという基本的な方針はそのままに、あとは参加者の自主性に任せ

た運営を続けている。ただ、これから先、地域で石川家文書を活用して行くにあたっては、目録の精度を高める必要があるため、参加者らと相談しつつ、作業の方法を変えてみたり、目録カードに作業の手助けとなるメモを入れてみたりと、工夫を凝らしながら進めている。

今回登壇いただいたのは、そんな緩やかな整理会に集う方々である。整理会が始まった二〇一五年から参加されている方もあれば、途中から参加されるようになった方、最近新たに参加されるようになった方と様々である。またほぼ皆勤の方もいれば、自身の都合に合わせて来られる方もある。そして、冒頭の自己紹介を見てもらえればわかるように、参加者はとくに現役時代に歴史に関わる仕事をしているわけではない。

そんな人たちがどうして古文書に興味を持ち、石川家文書の魅力にとりつかれ、参加者によっては毎回遠方から参加されているのか。難解な文書も多く、点数も膨大で終わりが見えない今の整理会の状況についてどう思うか。長い間一緒に整理に取り組んでいるが、実はいままて聞いてみたことがなかった。座談会を通して、いつもとは違う形で対話することによって、今少し客観的にこの会が見えるかもしれないと思ったのが、今回のインタビューシリーズで整

理会の参加者を取り上げることになった動機である。

そして、今回の座談会ではもう一人の「隣人」として、石川家文書の所蔵者である石川道代氏からもお話を伺った。石川さんは、文書のことを「紙切れ」といい、「興味が無い」といい、ときに「燃やす」とまで言う。けれど、けつして家の歴史をないがしろにされているわけではない。むしろ真剣に石川家の将来を憂いていたからこそ、意を決して大学に相談を持ちかけられたのだろう。しかし、ことは石川さんの期待通りには動かなかった。整理は遅々として進まず、研究者からはあれこれ言われ、家業に加えて文書の面倒までみる羽目になった。こうした状況は石川家だけに限らず、歴史資料を受け継いできた数多の所蔵者が等しく抱える葛藤である。「歴史研究の隣人」とならざるを得なかった所蔵者に対して、研究者をはじめとする「所蔵者の隣人」は何ができるのだろうか。それは、整理会の活動が順調に進んでいるからといって目を瞑るものではなく、この先、石川家も含め、未だ地域に残る数多の歴史資料に携わっていく中で、考えてゆかねばならない課題である。

今回の座談会にあたっては、なまじ日ごろ一緒に作業をしている方に参加いただくということもあり、半ば当事者の立場としては、聞き手

となったものの何を質問すればよいか戸惑う部分も多々あった。同席された先生方には多分に助けていただいた。

なお、今回参加者の方々が語ってくださったことは、座談会だからといって取り繕われたものではなく、(幾ばくかの筆者への忖度が含まれていたとしても) 日ごろの自由気ままな整理会の中で談笑しているときと同様に、率直な意見を語ってくださったことを申し添えておく。

座談会の開催から掲載まで時間をいただくことになったが、座談会の申し出に快く応じてくださり、そして今も変わらず整理会に来て下さる皆さまに深く感謝申し上げます。

(井上 舞)

註

- (1) 奥村弘「地域歴史遺産という可能性——豊かな地域歴史文化の形成のために——」(神戸大学大学院人文科学研究科地域連携センター編『地域歴史遺産の可能性』、岩田書院、二〇一三年)
- (2) 市沢哲「インタビューシリーズ 歴史研究の隣人たち 第一回 家じまいアドバイザー 屋宜明彦さん」(『LINK』Vol.11、二〇一九年、六四頁)
- (3) 井上舞「石川家文書をとるまく〈場〉」(『LINK』Vol.9、二〇一七年、三七—

四八頁)、同「地域資料における書籍の整理・調査について——石川家蔵書整理の事例から——」(『歴史資料継承論叢』第二号、二〇二五年)

